

10 . 保健・体育

「からだ育てについて考える」

一 研究の成果と概要

- 1 研究の成果
- 2 今次教研で論じられた問題と今後の課題

二 実践

レポートの骨子

子どもの「からだ」の否定的な状況に，体育授業，授業外のとり組みでどのようにアプローチしていくか。本報告では，具体的な実践事例を報告し，そのための視点とこれからの課題について明らかにしたい。

三 第58次教研のテーマと推進

村末 勇介（むらすえ ゆうすけ）

日置市立上市来小学校

一 研究の成果と概要

1. 研究の経過

5月に県内の11の地区支部で“とりくみ教研”を開催し、第56次教研で設定されたテーマに基づき、研究の具体的方法を確認するとともに、実践につなげるために各参加者の教育活動の研究過程について交流し合った。それを元に、個人・サークル・専門部会・職場それぞれ具体的にとりくみ、10月の本教研で実践レポートを持ち寄り討議を深め、鹿児島市の甲陵高校で11月4・5日の県教研へと集約してきた。第57次県教研では、各地区支部から正会員20名、オブザーバー5名（うち大学関係者1名）が集い、16本のレポートが報告された。提出されたレポートは、保健関係10本、体育関係6本であった。その内訳は、保健関係では、健康教育（総合学習含む）5本、性教育2本、フッ素洗口2本、特別支援教育1本だった。体育関係では、表現運動2本、長距離走1本、水泳1本、保健学習1本、全体会で、検討することとしては、「からだ育てについて考える」1本であった。

分科会の進行は、保健と体育の合同会を持ち、「からだ育てについて考える」のレポートを報告し、その実践の必要性の認識を深めた。共通する課題を討議し、子どもたちに自らの「からだをみつめていく」ことの確認ができた。その後、保健と体育に分かれて分散会。二日間の最後に再度合同会を持ち、それぞれ論議された内容を報告し、第58次のとりくみの内容と方針を継続的に深めていくことにした。

2. 今次教研で論じられた問題と今後の課題

(1) 合同会

一日目前半の合同会では、『からだ育てについて考える』のレポート1本を、保健・体育の共通課題としてとらえ、報告してもらい質疑応答・意見交換の場とした。二日目後半の合同会では、保健・体育の各分散会報告と共同研究者によるまとめがおこなわれた。

レポートは、「いのちの『土台』を豊かなものに」のテーマのもと、からだに対して目を向け・関心を持たせる授業を展開してきている。しかし、子どもたちのからだの「おかしさ」や、学習指導要領改訂の動向として、昨年夏の報告書『健やかな体を育むために』の中にプラス面を認めつつも、重大なマイナス面があることを指摘している。改訂の方向性は、子どもを数値目標達成に追い込む貧困な授業実践につながりかねず、ましてや、子どもの身体的発達の危機は、週2回の体育で扱えるほどに軽い課題ではない。

具体的実践としては、体育授業における「からだ」のとりたて指導として、高い場所からの飛び降り体験等を通して、非日常の感覚を味わわせた。さらに、坂道に立つ人間のからだは、無意識にバランスをとっていることを実感させ気づかせている。また、心とからだの解放として、どろんこサッカーを通して「遊び」を体験させ、その後手洗いで洗濯をし、洗濯物がなかなか乾かないことも気づかせる。日常の活動の中では、朝の会で、からだクイズを実施したり、足のしびれのメカニズムを調べたり、検尿回収日におしっこの学習をしたりなど、小さな学びの積み重ねを意図的に進めている。

今後の課題として、現代の子どもたちの持つからだのどこに問題があり、その原因は何かを緻密に探る必要性を挙げた。それは、生活実態・背景を理解した上で、子どものからだ丸ごと働きかける体育・健康教育の創造につながらなければならない。日頃感じていた子どものか

らだについて、それぞれの立場で具体的に意見交換ができ、充実した合同会となった。

(2) 体育分散会

最初に、合同会に引き続き、「からだ育てについて考える」レポート中の「短距離走50m走」の実践部分を取り上げた。主に子どもたちの技能を目に見える形にするための「スピード曲線」と「足跡」について議論が集中し、「スピード曲線」を何のために使うのか、短距離走学習にふさわしい距離は、8秒間走の教材価値は何か、等の有意義な議論ができた。また、報告者がエクセルで作った「スピード曲線」のシートも紹介され、HPにアップして欲しい要望がだされ、教具の共有が実現しそうである。

次は、奄美支部の「保健分野の調べ学習」である。教師が「教科書の解説をしてちょっと説明を加えるだけの保健学習になっている状況を打開するためにはじめた」調べ学習が報告された。しかし、形式的に子どもたちが教科書の内容を分担して報告するだけに終わっているため、調べ学習にはいるまでの導入やまとめ方、発表の仕方、質疑の準備など、今後さらに工夫の必要性を指摘する意見がだされた。また、保健教材研究会の研究成果の利用の提案もあった。

次は、ペースコントロールを意識した「長距離走の授業を実施して」の報告だが、報告者欠席のため詳細な実践内容については議論ができなかった。そこで、「イーブンペースをつかませる方法や教材について」、議論することとし、結果、参加者それぞれの実践の交流ができた。

次は、「表現活動 運動会にむけて」の報告である。報告者は、昨年も「表現運動」教材を報告。昨年の検討を踏まえて、今年のテーマは、「感動的なスポーツシーンを表現する」ことであり、様々なスポーツシーンを子どもたちと共同で創作し、運動会で発表した実践である。議論の中では、作品づくり過程での子ども動きの変化の様子や、小学校全体の表現活動の系統やコミュニケーション能力との関連等が話題になった。

「運動会 表現運動の取り組み」鹿児島支部の報告は、今県内で流行している「棒踊り」である。地域の保存会から学校に依頼があり、十数年前から実施。報告者は「ただ運動会のために踊らせるだけにならないよう、その踊りの由来まで知った上で踊る」という運動会までの学校全体の取り組みが報告された。報告者より「昔からの住民と、比較的新しい団地の住民とが混在した校区であり、今後は、後者が増えていく可能性があり、棒踊りを運動会で実施することをいかに保護者と合意をとるのか」という問題提起がなされた。それに対して、棒踊りの由来についての検討も含めて、そもそも学校教育でなぜ棒踊りをするのか、その教材価値をさらに吟味する必要があることが確認された。

最後に「できた！わかったと思える授業にするために」の肝属支部水泳の報告である。中学校での7時間のクロールと着衣泳の学習。異質グループを組みながら呼吸を大事にした内容である。議論の中心は呼吸についてあり、「命を守る」という面からも「文化」という面からも「呼吸が大事」だということは共通理解できたが、参加者から紹介された「ドル平泳法」の呼吸の方法やその理論的な背景について、はじめて聞く参加者も多く、水泳の実践がなかなか「面かぶり」クロールや「ぶくぶくパツ」の呼吸法から、脱出できていない現場の現実をあらためて痛感した。

3. 報告書作成参加者

正会員 村末 勇介（上市来小学校）

執筆補助者 西迫貴美代（鹿児島県立短期大学） 二川 政文（赤木名小学校）

二 実践 からだ育てについて考える

1. はじめに

わたしは、これまで、「いのちの『土台』を豊かなものに」というテーマを設定し、子どもたちのいのちをキラキラと輝かすことのできる授業や学級を創造したいと取り組んできた。

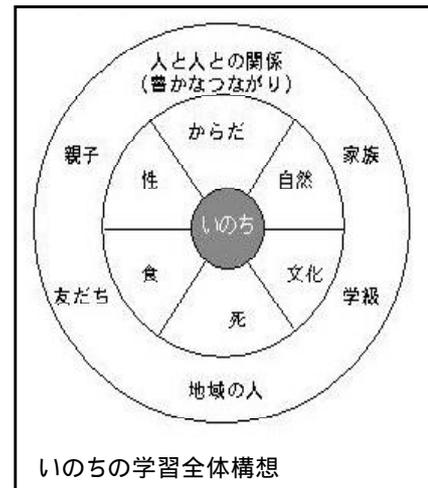
体育科での実践はもちろん、すべての教科と教科外の取り組みにおいて、

人と人を中心とする様々な「関係」を豊かなものにする

学びと経験の中身を、より豊かで確かなものにする

という2つを基本的視点として追究してきたつもりである。

右の図に示したように、「いのち」に関わる学習テーマは、自然・からだ・文化・性・食・死の6つである。これまでわたしが取り組んできた実践の中で、子どもたちが生き生きと学び、たしかに変容を遂げてくれたと手応えを得られた内容を整理し、設定した。それらを、個人や学級に閉じられたものとしてでなく、子どもたちにつながりのある人々から、あるいはそうした人々と共に学ぶというスタンスで学習活動を展開させたいと考えている。



6つのテーマのねらい

(1) 自然との関わりからの学び

一年を通して、じっくりと「自然」を味わう。周りにある植物や土、光や雨が季節とともにある現実にもふれ、それとの関わりの中で自分の「いのち」を感じ取る。

(2) からだの学び

「いのち」の宿る場としてのからだ。いのちを実感するために、身体活動を通してからだの具体的な様子やあたたかさ、感触などを確かめる。また、からだの動きの合理性を科学的に学び取る（主として体育学習）とともに、車いす体験などを通して「しょうがい」の意味を考える。

(3) 文化の学び

わたしたちを取り巻く様々な文化。そこには、これまで人間が継承・発展させてきた様々な努力や知恵が込められている。文化の本質への学びをもとに、過去に生きた人間のいのちにふれ、時間をこえて感動を共有する。

(4) 「性」の学び～性教育

いのちの感性的理解は、それを科学的な学習で補完することにより理性的認識となる。性を学ぶことによって、「なぜ自分が生まれたか」という根源的な問いの答えを自分の「存在証明」としてつかみ、自己の性的発達を主体的に受けとめる力とする。

(5) 「食」の学び

わたしたちのいのちを成り立たせる「食べもの」が、他ならぬ動植物の「いのち」そのものであるということに気づく。また、生産、収穫、加工、調理といった体験的な活動を

通して、食の豊かな文化的側面を学ぶ。

(6)「死」からの学び～デス・エデュケーション

子どもたちにとって、「死」は決して遠い存在ではない。生そのものが、実は「死」と表裏の関係としてある。死を学ぶことを通して、「今を、どう生きていくか」を考えていく。

本レポートにおいては、こうした枠組みで展開しているわたしの実践から、特に「からだ育て」のとりくみを報告し、今後の課題を探っていきたい。

2. 体育授業における「からだ」のとりたて指導

(1)からだを感じる力を磨く～「ステージの上からの飛び降り体験」を例に

体育館のステージに、可動式の階段や跳び箱を並べて高い台を作る。そこからステージ下に置いたセーフティマットの上に飛び降りる(だけの)「飛び降り体験」であるが、体がフワッと浮かんだり、空気の動きを皮膚で感じたり、からだの中をひんやりとした感覚が駆け抜けたりと、まさに非日常の世界を楽しむことができる。

わたし(たち)が小さい頃は、何も授業中にわざわざやらなくても、遊びの中で十分に経験したことなのだが、現代の子どもの世界からは、こうした遊びはほ



とんど消失してしまっている。生活環境の変化やテレビゲームの浸透のせいもあるが、子どもの

数が減り異年齢集団がなくなって、そうした遊びの「伝授」もなされないからだろう。その上、親や教師からは、「危ない遊びはだめ」と言われているわけだから…。というわけで、

2005年度・実践の概要(上市来小5年生)

学期	月	主なとり組み
I	4	8・体育館のステージの上から飛び降り体験 11・食べ物の学習～4年間で、約3トンも食べてきた 12・「おしっこ」から見えてくるいのち 12・からだのたくみさとおもしろさを学ぶ 20・話し合い「にわとりを飼うか」 22・1年生を迎える会「カミイチキマン」デビュー 26・茶摘み体験学習
	5	2・サバイバル21in高山・プロジェクトチーム結成 11・「何分で足がしびれるか」の実験 16・にわたりのひながやって来る
	6	3・熱射病によりにわとり一羽死ぬ 8・授業参観「いのち・生まれる」の学習 14・6年生と一緒に田植え体験学習 16・「大人への道しるべ」の授業(性教育) 21・人間代かき大ハッスル
	7	7・理科「いのちの誕生」の学習 16・にわとり二羽死ぬ 19・二羽の死体、野生動物により掘り返される
	9	8・意見を出す「にわとりを、食べるか・食べないか」 22・大豆収穫、中味空っぽ 30・納豆づくりに挑戦
	10	13・市来農芸高校・山口先生の特別授業「にわとり」 17・「ニワトリを食べるか」討論会 20・川原先生の特別授業「食べられる野草」 26・サバイバル21in高山・宿泊学習本番
	11	1・「上小ソーラン」練習本格開始 9・長半天を作る会 10・最後のニワトリが死ぬ 11・干し柿作りに挑戦 25・学習発表会「ザ・上小ソーラン」発表 27・高山ふるさと祭りでソーラン節発表
II	12	1・世界エイズデー、エイズ学習(1) 7・秋光園訪問で「ソーラン節」を発表
	1	12・「おじいちゃん、おばあちゃんこんにちわ」の学習開始
	2	2・エイズ学習(2) 8・車いすの乗り方、補助の仕方を学ぶ 17・南日本新聞社・藤本記者の特別授業 22・お年寄りのお宅訪問 24・西迫先生「コミュニケーションスキル」のワーク
III	3	3・お別れ遠足「カミイチキマン」(最終話)

わたしは、こういう体験の場も、可能な限りは学校の中で意図的に準備した方がよいと考えている。

ある女の子は、「とんでいるとちゅうに、からだがじゅーんとなりました。」と表現した。からだは、「じゅーん」となる感覚。今、どれくらいの子どもたちが味わったことがあるのだろうか。子どもたちのからだを、丁寧に耕していきたいものだ。

(2)からだの「力」に気づかせる～「坂道に立つ人間のからだ」を例に

体育の授業では、運動文化の科学的な学習とあわせて、身体運動や身のこなし方の合理性・美しさについても学ばせたい。

「体ほぐしの運動」で、緊張と弛緩の繰り返しにより自分のからだを意識させたり、他者とのボディコミュニケーションにより、からだをぶつけ合わせたり支え合ったりして、実感的にからだを学びとることを大切にしている。



つい先日の授業では、人間のからだは、無意識のうちにもどのようにバランスをとっているのかを学ばせようと、子どもたちを学校近くの坂道に連れ出した。

案の定、子どもたちは、毎日歩いている坂道で、自分のからだはどのように姿勢を保っているか、ほとんど意識してはいなかった。そこで、次の3つのうち、どれが正しいかを予想を立てさせ、調べてもらうことにした。

- A：坂道に立ったとき、人のからだは傾斜に関係なくまっすぐに立つ
- B：坂道に立ったとき、人のからだは下方にわずかに傾いて立つ
- C：坂道に立ったとき、人のからだは上方にわずかに傾いて立つ

すると、見事にバラバラな予想。彼らは、全く意識していなかったのである。ちなみに、学級PTAで保護者にも尋ねてみると、A 5人・B 2人・C 4人という予想。答えは、もちろんAで、半数以上が間違えてくれた。そう、たとえ大人であっても、意識しなければ気づかないことはたくさんあるのだ。

「自分では考えたことはなかったけど、人間は坂道でも体がまっすぐになっている事が分かった。友だちが坂で立っているのを見ると、無理しているのかと思って、自分もやったらふつうだったので、へ～と思った。」

日常生活の中で、無意識のうちからだはすごいことをやっている。それに「へ～」と、気づける場を持たせたい。例えば、それは、直立歩行可能なロボットのすごさを理解することにもつながっている。

(3)心とからだの解放～どろんこサッカー

梅雨の6月とは言っても、「どろんこサッカー日和」は、なかなかやってこない。雨が降って、気温が高くて、子どもたちの体調がOK...という日だ。数日前から、着替えも用意させ、じっとその日を待つ。

そして、とうとうその日がやってきた。久しぶりにまとまった雨が降り、校庭の表面にはりっぱな水のじゅうたんができあがった。

水着に着替え、その上に汚れてもよいズボンとシャツを着させる。いよいよ校庭へレッツゴー。そしてこの瞬間、子どもたちの個性が見事に現れる。

大胆に走る子、慎重に走る子、泥を掴んでからだに塗りたくる子、つま先立ちで汚れまいとする子…。しかし、だんだんと慣れてきて…誰かが、すってんころりん。これでスイッチ・オンだ。子どもたちは、大胆にボールを追いかけて始めた。



どろんこサッカーは、一言で言うと「遊び」だ。しかしそれは、現代の子どもたちの世界から急速に失われつつある「文化」であり、子どもの心とからだを解放させる可能性をもった価値ある「教材」でもある。

からだが少し冷えてきたら、切り上げ時。次は、そのままプールへと移動する。シャワーで泥を洗い流して、プールの中に入らせると「あったかーい」の声が上がった。なるほど暖かい。温泉並みだ。「水は冷たいもの」という彼らの認識は、きつと揺さぶられたに違いない。

プールから上がった後は、洗濯が待っている。水着の上にわざわざ着させておいたシャツとズボンが、ここで意味を持ってくる。いつもはスイッチポンの洗濯機だけど、当然手洗い。低学年の子どもたちは、ほとんどと言っていいほど経験していない。絞り方も、力の入れ方が分からない。二人組になって、反対方向にひねらせ、「ほら、協力するっていいね」と、一言付け加える。

洗濯物干し場は、教室に荷造り用テーブルをはって作った。ここから、洗濯物の乾き方の観察だ。まずは、重力でぽたぽたと落ちてくる水。新聞紙を下に敷いてキャッチ…。洗濯物がなかなか乾かない季節があることを、子どもたちは気にも留めていなかった。シャツとズボンは、数日かかってようやく乾いた。



3. 運動技術学習における「からだ」の位置づけ～5年生「短距離走」を例に

体育学習は、主として運動文化に関する科学を学ぶ場と捉えている。その過程で、自分自身のからだを認識させ、いわゆる「体力」や「運動能力」の育成も併せて図りたい。

短距離走の学習では、歩数、10メートル区間毎のスピードの変化、足跡が作り出すラインという三つの角度から「走り」を科学するという学習を中心に、より速く走るための技術を集団で追究する学習を展開した。2人の子どもの学びの様子を学習ノートから抜粋して紹介したい。



	Aさん	Bさん
スピード曲線	<p>最初はおそい。だいたい、後のスピードは同じ。途中つかれてくるのか、スピードが下がった。最後のスピードはもどった。1番スピードが速いのは、20 mから30 mの間。</p>	<p>僕の走りは、20 m位でスピードが上がった。30 ~ 40 mは、だんだん平均的にある。40 から50 mから1番速くなっている。</p>
足跡ライン	<p>1番曲っているところは10 mから20 mの間。30 mから40 mの間はほとんど真っすぐ。50 mのところは少しがたがたに斜めになっている。</p>	<p>0メートルから30 mは、真っすぐ走れたけれど、40 mからはぐにゃぐにゃに曲がりました。</p>
速く走りたい	<p>お手玉がまがっているところはスピードが遅くなっていたので、その部分を速く走るためには、まず曲っているところを真っすぐ走ればいいと思います。スタートからゴールまで真っすぐ線を引く。</p>	<p>ぐにゃぐにゃ走らないように、石灰とかで線をつけて、そこを走る。線を中心に走る。腕をたくさんふる。</p>
感想	<p>50メートル走の勉強をして、分かったことは、わたしたちはまっすぐ走っていると思ったけど、すごく曲がっていました。曲がっている所がありそうだったので、線をひいて、まっすぐ走りました。そしたら、タイムが8秒1と速くなりました。いろんな事にチャレンジして、なぜできたか、なぜできなかったか、その時考えてみたいです。</p>	<p>50 m走は、結局タイムはちぢまなかったけど、次はそのなぜちぢまなかったのかを調べてみたいと思った。</p> <p>そして、走る時は、1本じゃなく2本の線の方がタイムがちぢまると思った。走るのとはとてもつかれるけど、科学するのは楽しかった。</p>

4. 日常の教育活動における「からだ」の学習

1年間のとりくみの中で、何回かは子どもとともに「いのち」について特別に学ぶ機会を持ちたい。「性」や「死」などをテーマに、一定の時間集中して学ぶことで、科学的知識を身に付け、自他の「いのち」を見つめ直すことにつないでいく。

だが、わたしは、こうした特別な学習場面だけではなく、日常的な関わりの中で、子どもたちの小さな学びを積み重ねていくことも非常に大切だと考えている。「塵も積もれば…」ではないが、「教育効果」としては決して小さくないはずだ。意識的に進めていきたい。

(1)朝の「からだ」クイズ

朝の会の終わりに、数分間使って「朝の『からだ』クイズ」を実施している。「虫歯の原因は何か?」、「赤ちゃんと大人の骨の数はどちらが多いか?」、「爪は1日にどれくらい伸びるか?」...言ってみれば、からだに関する雑学クイズだ。三択問題を基本にしているので、ゲーム感覚で毎朝盛り上がる。学級づくりにとっても効果的。

現在使っているネタ本は、竹内修二著『解剖博士・竹内修二先生のはて・なぜ・どうしてからだのしくみクイズ』(5巻シリーズ/合同出版)であるが、こうした本はたくさん出版されているので探せば簡単に見つかるだろう。ちなみに、昨年度5年生の子どもたちには、養老孟司著『バカなおとなにならない脳』(マガジンハウス)を使った。この本も子どもたちには、好評だった。

(2)足のしびれを科学する

毎日の朝の会で「みんなに伝えたいこと」という自由発表コーナーを位置づけている(その他のねらいももちろんあるが)。そして、しばしばそこでの発表をきっかけに、いのちの学習もスタートする。

家庭訪問の期間中に、「足がしびれたので、家庭訪問はきらいです」という日記を書いた子がいた。みんなで楽しく読み合った後、足のしびれ体験の実際をそれぞれ出してもらおうと、ほとんどの子どもたちが、何とも表現しづらい微妙な「感じ」を味わっていた。そこで、「どうして足はしびれるのだろうか?」と投げ返してみると、期待通りに「わかりません」という返事。わたしは、さっそくそれを自由勉強の課題にすることを提案した。



次の日、お母さんに聞いてきたというYさんが「血液の流れが悪くなるから」と発表してくれた。たしかに、わたしが調べた本にもそう書いてあったことを伝え、もう1つ、「神経が圧迫されることによる知覚障害」という説もあることを付け加えた。

さて、これで終わったらつまらない。ここから先が「からだ」を通した「学び」である。実際に、いったいどれくらいの時間で自分の足はしびれるのだろうか?「ようし、実際に足をしびれさせてみよう」と、みんなで実験を始めることに...

教室に常備しているござを広げて、みんなで正座してみると、約10分間でしびれを訴える子が出始めた。だが、まったく平気な顔をしている子もあり、授業時間との関係で、一端実験をストップ。もう一度、それぞれが自分の家で調べてくることにした。

次の日、実験結果が出そろった。15分、45分...と、子どもたちの足のしびれ開始時

間は、みんなバラバラ。そこで、「では、なぜそういう結果になったのだろうか？」と再び問うと、「体の大きさの違い」、「座る姿勢の違い」、「日頃の生活経験の差」等々...と考えを進めてくれた。

(3)検尿回収日のおしっこ学習

検尿の回収日。子どもたちは、朝とれたての新鮮な「おしっこ」を大切に教室まで運んできてくれる。それは、本物のおしっこを、教室という学びの場に持ち込める、年に一度のとおきの日だ。



例年、この日は、金森俊朗氏の実践に学び、必ず1時間目に「おしっこ」の授業をすることになっている。題して、「おしっこから見えてくるいのち」おしっこなど、いつもは出しっ放しで、ただただ流し去るだけか、必死でがまんするだけの対象であり、あまり好まれる存在ではない。まず初めに、子どもたちに、おしっこのイメージを発表してもらおう。すると、「きたない」「くさい」「気持ち悪い」「黄色い」...と、出るのはやっぱりマイナスイメージ。

「そうだよねー。」と受け止めながら、ここからが学習の始まり、始まり。

子どもたちにおしっこの出る仕組みを予想してもらおうと、案の定、「うんこと同じように出てくる」と考えていた。そこで、簡単に血液のはたらき、腎臓のはたらき、膀胱のはたらきを説明し、後は子どもたちから出された質問への回答で補った。

一通り、おしっこがどうやって出てくるかが分かったところで、あらためて自分のおしっこを見つめてもらう。すると、子どもたちは初めとはまったく違って、何かいとおしいものでもあるかのように、じーっと見つめてくれた。「いのち」の具体的なありようを、自分のからだを通して、リアルに学ばせたい。おしっこは、今生きている証を見えやすく映し出す、価値ある教材である。

金森氏は、おしっこのことを、毎日届けられる「小」さな「便」りと呼ぶ。

(4)からだの反射を楽しむ...膝蓋腱反射の実験

人間のからだには、ある刺激に対して無意識に起こる「反射」という反応がある。誤って熱いものを触って手を引っ込める動作は、とっさの危険を回避するためのもので、脳が判断を下すのではなく、熱さという刺激に対して脊髄が筋肉を収縮させる命令を出して起こるものだ。顔に水がかかる瞬間に目を閉じる眼瞼反射もその一つで、こちらは延髄反射に分類される。(参考:『からだのしくみ事典』成美堂出版)



3年生の子どもたちにとって、初めて出会う理科の授業は、この「反射」を材料に、みんなでからだを楽しむことから始めようと思った。もちろんそのことを通して、理科学習の大事な方法である実験の意味や、「科学的であること」の1つの条件としての再検証の可能性についても理解させたいと考えたのである。

実験に選んだのは、膝頭のくぼみをたたくと、つま先が独りで跳ね上がるという膝蓋腱反射である。脚気の診断で知られるものだが、わたしは、小さい頃遊びの中で知り、不思議で仕方なかったことを覚えている。

「残念ながら」と言おうか、「思惑通り」と言おうか、子どもたちは、この反射につい

てまったく知らなかった。次の文は、ある子どもの感想である。「今日、はじめてじっけんをして、人間にはこんなふしぎなことがあるなんて、とはじめてしりました。まだまだ理科では、いろいろあると思います。理科のじっけんできいろいろして、小さい子にもおしえてあげたいです。」

わたしたち大人にとっては、あたりまえのことでも、子どもたちは新鮮な驚きで受け止めてくれるのである。

(5)「いのちの音」を聞いてみよう

「いのちって、いったいどこにあるのでしょうか？」…この質問を投げかけると、子どもたちのほとんどが、自分の胸に手をあて「心臓」と答える。「本当にそうですか。では、腕や足にはいのちはないのでしょうか？」と、問い返すと、ハッとした表情に変わるのだ。



「いのち、いのち」と口で言うのは簡単だが、こうして少し考えさせると、それまで意識していなかったことが浮かんでくるものである。彼らは、いくつかの部分挙げた後、「そうだ、からだ全体だ。」と気がついてくれた。

しかし、まだもの足りない。このあたりまえのことを、もっと具体的に、もっと実感として学ばせられないか。

そこでわたしは、子どもたちに、自分自身のからだを手でしっかりと触らせた後で、友だちのからだに耳を当て、そこから聞こえるいろいろな音をさがしてもらうことにした。心臓の音、お腹の音…。水を飲んでいるとき、声を出しているとき、その時どんな音がするのか？

彼らは夢中で取り組んだ。そして、「おなかの音は、ゴロゴロゴクン」「のどはゴロゴロキュー」「友だちのおなかやほっぺたの音をきいておもしろかったー」と、友だちのからだから、その温もりと一緒に「いのちの音」を聞きとってくれた。

これは、思春期の入り口に立つ高学年になってからでは、なかなかできない学習だ。低学年の子どもたちだからこそ、友だちのおなかの音も楽しく聞いてしまうのである。

5. おわりに

以上、わたしの「からだ育て」の実践について述べてきた。学習主体としての「からだ」が、まさに学習の対象として自分自身を客体化する方法は、ここに紹介した以外にも多様にある。それらを、単なる教師の思いつきのレベルで展開していくのではなく、子どもたちにとってひとまとまりのからだに関する科学的認識を形成し、あわせて真にからだを「拓く」ためのとり組みとして、意図的・計画的に展開していく必要がある。

そのためには、まずもって現在の子どもの持つ「からだ」の問題の所在とその原因とを緻密に探らなければならない。その際、戦後の「生活綴り方体育」の実践者であった佐々木賢太郎の視点と思想に改めて学ぶ必要があると考えている。

三 第58次教研のテーマと推進

1. 第58次教研のテーマ

(1) 子どもの主体的な学びを引き出す実践の創造

- 技術指導の系統と学習内容の追求
(筋道立った技術の指導と教える中身の工夫, 学習集団作り)
- 健康教育(保健学習, 性教育, 「総合的な学習の時間」など)の実践 - 教材, 教具の開発と工夫
- 自主編成に基づく「総合学習」の推進(人権・平和・環境・生と性など)
- その他
- ア. 創造的な保健・体育的行事
- イ. 子どもの生活課題と保健, 体育・スポーツのかかわり
- ウ. 子ども・保護者によりそう教職員の相談活動のあり方

(2)現場の諸問題

- 労安法導入に伴う衛生推進者(管理者)問題へのとりくみ
- 職員の健康診断を管理職及び設置者に返していくとりくみ
- 保健「主任」の形骸化の具体的とりくみ
- 養護教諭の職務を確立するためのとりくみ(兼職発令, 医療的ケアの問題)
- 「戦争ができる国」づくりのための健康・体力づくりの問題点と対応策
- その他(「子どもの権利条約」を職場に生かすとりくみ等)

2. 研究の推進についての課題

学習指導要領の見直しに向け, 中央教育審議会が動き出している。文部科学省は, 「ゆとり教育」から一転して「基礎・基本の定着」へと方向転換をはかり, 各教科に対して「ミニマム」の提示を迫っている。それに答えるかたちで「体育科」でも, これまでの「楽しい体育」「めあて学習」の見直しが迫られ, 「ミニマム」の模索が始まっている。

このような「すべての子どもに共通にここまでは」「国民的基礎教養」という視点は評価されるところであるが, 問題はその内容である。そこでのキーワードは, 「健やかな体」と「身体能力」であり, 体育科の学力を身体能力に限定し, 測定可能な目的設定が重視されて, 子どもたちをひたすら数値達成に追い込むだけの体力づくり体育が復活しそうである。からだに注目する背景には, スポーツ(運動文化)の追求だけでは, 数値化したアピールが困難で教科の存続がむずかしいというお家事情があるようだ。

私たちは, そのような外圧から教育内容を設定するのではなく, 運動文化に挑む子どもの示す事実(とりわけできない子どもや弱い子どもの声)や, 生活をまるごとで捉えた子どものからだの現実から教育内容を設定し, すべての子どもに確かな学力を保障しなければならない。

保健体育分科会では, 体育・スポーツ学習の基本目的を「現代科学の成果を教育内容と方法に反映させ, 文化的価値を発見しながら人間形成に役立てること」と設定してきた。その具体的な授業づくりの方法としては, 子どもたちに実験や調査活動を体験させながら, 科学的に精選された教育内容をぐぐらせることにより, 技術認識(わかること)と技能習熟(できること)の統一を目指し, かつその過程で多くの学ぶ宝を秘めた存在としての学習仲間を再認識する活動としてグループ学習や集団思考を組織した授業づくりを模索してきた。今後更に「子どもを主体にした」実践を前進させていかなければならない。

体育実践記録のまとめについては, 「子どもたちにどんな力をつけさせたか(学力)」, 「どのような方法でとりくんだか(授業づくり)」, 「子どもたちはどのように変り, 力がついたのか(評価)」の三点で整理する。そのことによって実践者自身が「次の課題は何か」を発見することができる。合わせて「地域・保護者とどのようにつながったか」の視点を加えることによって, 学校と地域とが協同した「学校づくり」の論点が引き出され, 今後の研究がより発展・深化してくる。